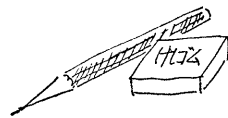


飯島半十郎の生涯と思想（その三）

『幼稚園初歩』の著者——

小林 恵子



（八）「洋々社談」の編集

「東京新報」について彼が編集者となって活躍した雑誌に「洋々社談」がある。「洋々社談」は明治八年四月から十六年三月にかけて第九十五号に及んだ月刊雑誌で、第七十二号までの奥付に「編輯兼印刷人飯島半十郎」と記されている。次号以下は岡敬孝となっており、その事情はあきらかでないが、最後の号となった第九十五号に社員人名が掲載され、半十郎の名前が記されている。社員の名前は文部省編集局の西村茂樹、木村正辞、東京帝国大学教授の那珂通世、黒川真頼、小中村清矩など新進の洋学者たちが名前を連ねている。「洋々社」は明治八年、

こうした文部省や大学関係の学者が中心となって形成されたもので、毎月一回、上野の不忍池畔の長蛇亭で会合をもち、月刊雑誌「洋々社談」を刊行した。

明治七年二月から八年十一月まで第四十三号で終った学術団体明六社の機関誌「明六雑誌」は、国民の知識の啓蒙を目的としたが、「洋々社談」も広く知識を世界に求め、洋々の楽しみを読者と共にわかちあうことを目的としたものであった。これは「明六雑誌」の廃刊の年に創刊されており、西村茂樹は両雑誌に関係した人であった。「洋々社」の会合に集まった学者の多くは、四、五十歳を過ぎており、創刊の頃三十五歳であった半十郎は若い方であった。ここで彼は多くの知友を得た。特に晩年まで親しくしたのは彼より年若かった大槻啓溪の長男、如電

および次男の文彦である。彼の辞世の句「主もなく、おやもなき身の楽寝哉」を代筆したのは如電であった。如電は「日本洋学編年史」を、文彦は国語辞典「言海」を出版した。この他「古事類苑」を編纂した小中村清矩、那珂通高などとも親交深く、小中村は「幼稚園初歩」の序文を中村正直の漢詩の次にかな文字で記している。

こうした学者の多くは幕臣で、早くから洋学を学んだ漢学者たちであった。小中村清矩は三十五号で「社談会集の記」と題し、洋々社談について「此社談は、おの／＼何事にまれ、つゝみあへすうち出して心ゆくをうへなかつたのしとするは、あながちにをりにあわせんとし時にそむかづとして世にはめられんとはあらづかし、まして彼品のごとく、よき価をもとめて、うらんとしも思へらづ」と述べ編集者半十郎の姿勢を記している。雑誌の内容は多岐にわたり、西村茂樹の「人口論」「男女同権説」大槻文彦の「印刷術ノ史」伊藤圭介の「日本植物図説序」などその範囲は広く諸外国に及んでいる。半十郎の書いた題材は十五で、この中には後年の浮世絵と関係のある娼妓フミの話や柳橋での大食会の話など、学術的な論文にまじって江戸の情緒を描いた作品も面白い。

この雑誌は朝野新聞社をはじめ、東京、大阪の十数か所が売

捌所となっており、文明開化の時代にあつて知識人たちの間で読まれたようだが、発行部数はあきらかでない。発行所ともなつた「朝野新聞社」は彼の騎兵時代の上官、成島柳北が経営している新聞社であり、同じ幕臣として、ジャーナリストとして、成島の援助や指導があつたものと推測される。

(九) 文部省、山林局の御雇

この春、飯島家宅を訪問した折、私は彼の遺品の中に二枚の

◀ 文部省及山林局の御雇の証書

飯島半十郎

飯島半十郎

報告課^ニ雇入^一月 山林局御雇申付
金二十五圓相渡候事 月給金貳拾圓給
明治八年三月十日 興候事
明治十二年六月十日

文部省

山林局

証書を見いだした。一枚は文部省、他は山林局のものである。

彼が文部省の教科書編纂に関係していたことは数多くの教科書によってあきらかであっても、その職名は不明であった。私の調査した限りでは、官吏職の名簿から彼の名を探すことは不可能であった。成島柳北は幕府瓦解の後は下野して新政府に仕えなかったが、彼もまた官途につくことはできるだけ避けていたと考えられる。

別号「局外閑人」も彼の生き方を示している。天保、文久と江戸時代に育つて明治維新を迎えた旧幕の遺臣たちは、新政府に對しきわめて客観的なさめた見かたをしていたと言われる。

言いかえれば、負け犬として彼らはできるだけ官途と関係のない分野で、文筆や学問、研究、宗教、趣味の世界に独自の生き方を求めており、浮世絵研究に打ちこんだ彼もまたその一人であった。二枚の証書は、いずれも御雇として何等かの仕事の委託を受けたもので、文部省の方は、数々の教科書の編纂で長期にわたったが、山林局は凡そ一か年に過ぎない。明治十二年五月、内務省に山林局が設置され「山林法ノ設立」のため日本各地の山林に関する沿革を調査することが急務となった。このときの局長、桜井の「山林局務引継書」⁽³⁾には次のように記されている。

「木曾諸山ハ本邦第一ノ名山ナルヲ以テ特ニ飯島半十郎ヲ派出シテ之ヲ調査セシメタリ、半十郎前日帰京草按ヲ示シタリ遠カラスシテ淨写具上スルナルヘシ」

こうして彼は、明治十二年から山林局の御雇として「木曾沿革史」を作成した。二冊からなる「木曾沿革史」は出版には至らなかったが、翌年六月二十六日、明治天皇が同方面を御巡幸の折、車駕福島駅に到着した時、蘇山伐木図二巻に此の書を添えて天覧に供えたとの事で、今もなお帝室に納本してあると言⁽⁴⁾う。

以上のことから推測されるように、一時的な御雇とは言っても、飯島の仕事はかなり高く評価されていたことが理解される。そして二枚の証書から感じられることは、月給が高いと言⁽⁵⁾うことである。明治初年、米一石の正米相場は四〜五円内外であったから、一か月金二十五円（文部省）二十円（山林局）はかなり高額であったと言えよう。

興味ぶかいことに、半十郎が御雇となった山林局に、東京女子師範学校附属幼稚園の主任となったドイツ人松野クララの夫、松野崎^{はまざ}が勤務していたことである。松野は明治十五年山林学校々長となり、我が国の林学に尽力した人で、独逸林学を学んだ最初の人である。半十郎がこの松野と親交があったかどうか

かは明らかでない。しかしジャーナリストでもあり教育界に通じていた半十郎は、松野潤、クララの事はおそらく知っていたに違いない。

(十) 幼児教育に関する著書

彼が文部省報告課に御雇となつて数多くの教科書を編纂したことは一覽表として(その一)ですでに掲載したので参照していただきたい。その後、また新しく彼の作品を見つけた。

「日本暗射地図符合解」(文部省刊明・10・4)である。ほかに校として「暗射図符号解」(文部省刊明・9・4)があり、これは久保讓次編 内田正雄閱 飯島半十郎校となつている。このように彼の手がけた仕事は今後もまだ発掘される可能性があるが、地理、物理、道徳、歴史、教育と多岐に及ぶ数々の著書に驚かざるを得ない。

彼が文部省の御雇として手がけた最初の仕事は、「幼稚園」の校であり、年代順に幼児教育関係の文献を記すと次の書がある。

★「幼稚園」ロンゲ著 桑田親五訳

巻上 稲垣千頰、那珂通高校

巻中 那珂道高、飯島半十郎校
巻下 飯島半十郎校

(省刊)

(巻上・中は明治九年一月刊、巻下は同十一年六月・文部

省刊)
★「加爾均氏庶物指数」カルキン著

黒沢寿任訳 飯島半十郎校

明治十年 文部省刊

★「幼稚園初歩」飯島半十郎著

明治十八年 青海堂

★「幼稚智恵のみちひき」上、下 飯島半十郎著

明治十八年 修静館

この他、幼児教育について多少なりとも関係のあるものとして次の書がある。

★「初学家事経済書」上、下 飯島半十郎編集

明治十五年 虚心堂、尚友堂

★「家事経済書」飯島半十郎編集

明治二十三年 東京博文館

この「初学家事経済書」は女子小学高等科第八学年教科書用に書かれたものである。「家事経済書」には「傳婢へ云渡すべき条件」「吉田松陰先生の家庭教訓」などが記され「善悪娘の

比較」がなされ「女に五つ文字」として清、貞、美、閑、胎をあげている。清は礼儀、みだしなみ。貞は操。美は心の美しさ。閑はものしずか。胎は氏、素性の正しいことをさしている。こうした「家事経済書」を読むと彼が儒教的な考え方に基づいて欧米の合理的な家事方法を折衷させようとしていることが理解できる。彼は我が国古来の生活の知恵を大切にして、先輩の説を屢々引用している。「佐久間象山の書簡」「貝原篤信娘へのさとし状」などがその例である。こうした一見古めかしく見える考え方と同時にその論説は極めて詳細で科学性に富み、合理的で実際的であるところが彼の書の特徴である。

このことは「幼稚園初歩」や「幼稚智恵のみちひき」にも言えることで、彼はフレイベルの説に基盤を置きながら、実際の方法論では、我が国古来の玩具を使用し折衷させるやり方を試みている。

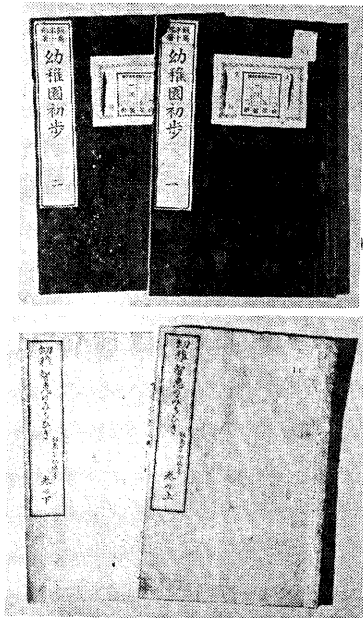
(十一) 幼児教育に従事？

彼は「幼稚園初歩」の凡例で次のように記している。

「方今各地幼稚園の設ありと雖、世人未だ幼稚保育の肝要なることを知らず、教育に従事する学士と雖、或は論して幼稚園

は、却て幼稚才能の発達を妨ぐるものなりといふ、これ大なるあやまりなり、予故に此の書を著はし、世に幼稚園の設なくはあるべからざることを説き、又簡易なる幼稚保育の方法を説きて示すなり、予の此の著あるは、実に教育に従事し、深く感ずる所あればなり、明治十八年二月 著者 虚心識（——線は筆者）

これをみると彼は実際に教育に従事していたとあり、明治十八年二月とあるから、それ以前のことになる。彼は、その頃、埼玉県蔵国比企郡松山町九十八番地に住んでおり、玉林晴朗の書いたもの（6）を読むと、「虚心は明治二十年頃武州の松山町に◀「幼稚園初歩」と「幼稚智恵のみちひき」



方面に足を運び詳細な研究をなし、名著「葛飾北斎伝」をはじめ「歌川列伝」「浮世絵師便覧」など数多くの著作を残した。
 (その一、表で掲載)しかし彼の努力は酬われること少なく、晩年は好物の酒代も友人から贈られていたようである。晩年は娘と二人で上根岸の元三島神社の脇に住んでおり、その近くに大月文彦も住んでいた。胃腸で亡くなる前に、酒を出す故沢庵でかりかりと音をたてて一杯飲んで貰いたいと知友を集めた事があり、彼の藏品は此の時に多く売り払われてしまったと言ふ。その頃の歌に「笛竹の根岸の里に住みぬれど世にならずべきひとふしもなし 虚心生」とある。明治三十四年八月一日歿、享年六十一歳。

誰からも知られることなく埋れていた半十郎の生涯をひもとくことによつて、私は倉橋惣三の言つた言葉「兎に角関信三につぐ、当時の幼児教育の研究者では無かつたかと思はれる」という意味を思いめぐらしている。浅学な私にとつて、彼は余りにスケールが大きく趣味豊かな江戸っ子であり、淡々と生きたその姿は、まさしく虚心がふさわしい号の人として世界の中の日本の将来を考えていたと言えよう。

研究調査のため多くの方々にお世話になったことを心から感謝申しあげたい。

なお「幼稚園初歩」「幼稚智慧のみちひき」は「明治保育文献集」⁽¹⁰⁾に複製版として掲載されていることをご紹介しておきたい。
 (国立音楽大学)

註(1)「洋々社談」岡敬孝編集 第九十五号 明・16・3 国学院大学図書館収

(2)「洋々社談」飯島半十郎編集 第三十五号 明・10・10
 (3)「山林局務引継書」明・13・3 早稲田大学図書館、大隅文書所蔵(長池敏弘著「桜井勉の生涯とその事蹟」(一)

「林業経済」No.305 昭・49 林業経済研究所)

(4)玉林晴朗著「浮世絵研究の先覚者飯島虚心」『書物展望』昭・13・7 28頁

(5)大曲駒村著「飯島虚心翁」『書物展望』昭・9 319頁

(6)玉林晴朗著「前掲書」32頁

(7)玉林晴朗著「前掲書」

(8)春風道人著「明治逸士伝 有髮比丘根香亭」明・38・6・

25『東京日々新聞』

(9)倉橋惣三、新庄よしこ共著「日本幼稚園史」昭・9 フレ
 ーベル館 378頁

(10)岡田正章監修「明治保育文献集」第四巻に収録 日本ら
 ぶらり 昭・52